

主体的に問題解決しようとする児童が育つ社会科学学習

名古屋市立天子田小学校教諭 永 瀬 智 仁

I 研究のねらい

私は、社会科学学習を通して、「主体的に問題解決しようとする児童」を育てたい。私が考える「主体的に問題解決しようとする児童」とは、社会的事象に対して見いだした問いについて、根拠を伴った予想を基に見通しをもって学習を進める中で、学習を振り返ることを通して自らの学習を調整しながら、問題解決に向かうことができる児童である。

令和3年に出された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」では、「9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」の中で、「学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげるなど、学習の進め方を自ら調整していくこと」と述べられており、児童が見通しをもって学習を進めることや、自らの学習を調整しながら学ぶことが重要視されていることが分かる。また、国立教育政策研究所教育課程研究センターは、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料小学校編社会の中で、主体的に学習に取り組む態度の評価について、「社会的事象について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究・解決しようとしているか」と示し、社会科学学習においても、児童が予想を基に見通しをもって学習を進めることや、その中で学習を振り返って自らの学習を調整することが重要であると述べている。

現代の社会では、グローバル化や技術革新等により、社会構造は大きく、急速に変化しており、予測困難な時代となっている。主体的に問題解決しようとする児童を育てることは、変化する社会の中で生まれる新たな課題に対して、試行錯誤を繰り返しながら解決方法を考えて乗り越えようとする、よりよい社会の形成者としての資質・能力の育成につながると考える。

II 研究の方法

- 1 研究の対象 名古屋市立天子田小学校 第5学年 23人
- 2 基本的な考え

兵庫教育大学名誉教授の米田豊氏は、著書の中で、『主体的に学習に取り組む態度』は、子どもの思考や認識内容とともに育てることが重要である。つまり、当て推量の予想のみでは、子どもが主体的に学習に取り組んでいるかを評価することはできない。主体的に学習に取り組んでいると評価できるのは、予想を『仮説』へと高めている姿である」と述べている。米田氏の示す「仮説」とは、「学習課題の解を既習知識や対話により獲得した内容を活用し、それらを根拠として示すこと」であるとしている。

そこで、私は、学習問題に対する予想を根拠の伴った仮説へと高め、仮説の検証に向けて個々で学習を進めることで、目指す児童の姿に迫ることができると考えた。児童が仮説を立てることで、仮説の検証に向けて調べる内容や方法が児童の中で明確になり、学習問題の解決に向けた見通しをもつことができると考える。また、仮説の検証に向けて学習を進める中で自らの学習を振り返ることで、次の学習の見通しをもち、学習を調整しながら学習問題の解決に向かうことができると考える。

以上のことから、社会科の基本的な学習過程「つかむ」「調べる」「まとめる」段階の中に、次のような工夫を取り入れて実践を進めることにした。

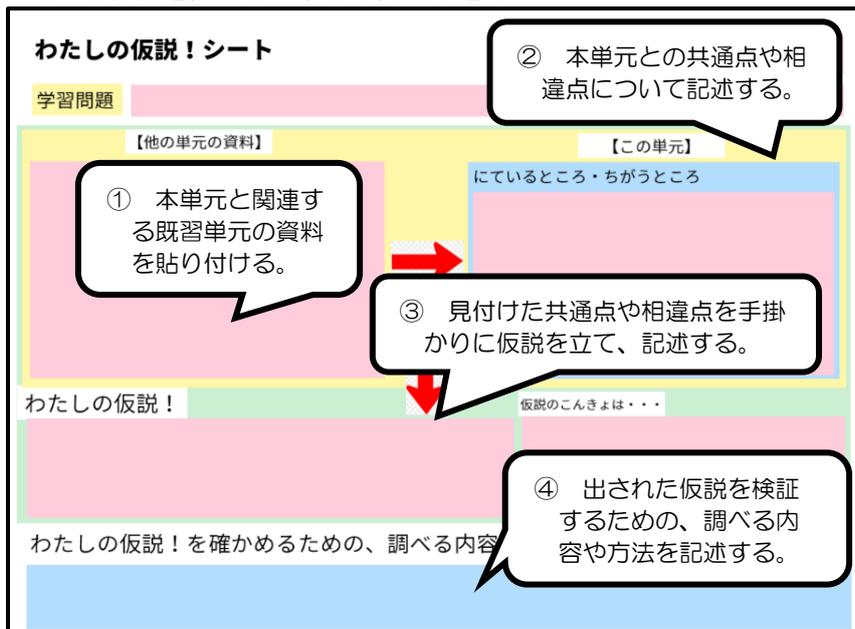
(1) 「つかむ」段階（学習問題に対する仮説を設定し、学習の見通しをもつ）

本研究では、探究学習・協働学習システムとして「ロイロノート・スクール」を用いて実践を進める。

単元を通して解決を目指す学習問題を設定した後、ロイロノート・スクールで「わたしの仮説！シート」【資料1】を作成する。まず、本単元と関連する既習単元の資料を貼り付け、提示された本単元の資料と比較することで、共通点や相違点を考え、記述する。

次に、見付けた共通点や相違点を手掛かりに仮説を立て、記述する。

さらに、仮説を検証するための学習計画を個々で考え、調べる内容や方法を記述する。



【資料1 「わたしの仮説！シート」】

(2) 「調べる」段階（学習を振り返り、自らの学習を調整する）

作成した「わたしの仮説！シート」を基に、仮説を検証するための学習計画表【資料2】を作成する。まず、「調べる仮説」の欄に、作成した「わたしの仮説！シート」を貼り付ける。そして、仮説の検証に向けて個々で調べていく。調べて分かったことは、学習計画表の中の、「検証結果」の欄にまとめていく。各授業の終末には、自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて、「で

きた」「まだ途中」「できなかった」の3段階で評価し、評価の理由を「学習を振り返って」の欄に記述する。その後、検証を目指す仮説を変更するかどうか、調べる内容や方法はどうか、次時の学習について考え、「次の学習に向けて」の欄に記述する。このような活動を繰り返すことで、自らの学習状況を基に学習を調整しながら学習問題の解決に向かうことができるようにする。



【資料2 学習計画表】

(3) 「まとめる」段階（調べたことを共有し、学習問題に対する考えをまとめる）

「調べる」段階に個々で追究した仮説の検証結果を発表し合い、学習問題に対する考えをまとめる。そして、これからの社会の在り方について、学習してきたことを基に話し合い、自分の考えをまとめることができるようにする。

3 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「つかむ」段階において、既習単元の資料を基に「わたしの仮説！シート」を作成することは、学習問題に対する仮説を立てる上で有効か、「わたしの仮説！シート」の記述内容からつかむ。
- (2) 「調べる」段階において、各授業の終末に自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて評価することは、自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学習問題の解決に向かう上で有効か、学習計画表の記述内容からつかむ。

Ⅲ 子どもの実態

- 1 調査日 令和5年5月15日
- 2 調査方法 学習プリントの記述分析・質問紙法
- 3 調査対象 名古屋市立天子田小学校 第5学年 23人
- 4 記述調査の結果と考察

(1) 学習問題に対して、仮説を立てることができるか。

単元「米づくりのさかんな地域」において、「庄内平野では、どのようにして米づくりを進めているのだろう」という学習問題を設定し、学習問題に対する予想とその根拠について、学習プリントに記述した。記述内容を分析すると、学習問題に対して、仮説を立てることができた児童は23人中8人であった。一方で、学習問題に対して、予想を立てることはできたものの、予想を裏付ける根拠を記述することができなかった児童は23人中11人、学習問題に対する予想を立てることができなかった児童は23人中4人であった【資料3】。このような実態から、学習問題に対して、仮説を立てるための手立てが必要なことが分かった。

仮説を立てることができた：8人 (A児)	予想を立てることはできたものの、予想を裏付ける根拠を記述することができなかった：11人 (B児)	予想を立てることができなかった：4人 (C児)
n=23		

【資料3 「仮説を立てること」について】

(2) 学習を振り返り、学習の取り組み方を考えようとする意識はどの程度あるか。

質問紙法で、「①課題に対する予想を立てることを大切にして、学習に取り組んでいるか」「②学習後に自分の取組を振り返り、次にどのように学習を進めるかを考えているか」を問い、その人数をクロス集計した【資料4】。この結果から、課題に対する予想を立てることを大切にして、学習に取り組んでいる児童は、学習後に自分の取組を振り返り、次にどのように学習を進めるかを考えようとする意識をもっている傾向があることが分かった。

①課題に対する予想を立てることを大切にして、学習に取り組んでいるか	いつもしている	3人 (A児)	3人	1人	
	している	3人	3人 (B児)	2人	
	あまりしていない		1人	4人 (C児)	1人
	していない			1人	1人
		いつも考えている	考えている	あまり考えていない	考えていない
②学習後に自分の取組を振り返り、次にどのように学習を進めるかを考えているか					

【資料4 学習の取り組み方を考えようとする意識】

Ⅳ 第1次授業研究（6月）

- 1 単元 水産業のさかんな地域
- 2 目標

我が国の水産業について、目的によって異なる漁法が行われたり、輸送方法や販売方法を工夫したりして良質な食料を届けるなど、食料生産を支えていることを理解し、これからの水産業の在り方について考えようとする。また、生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して仮説を立て、自らの学習を調整しながら調べ、水産業に関わる人々の工夫や努力を関連付けて、食料生産を支える働きを考え、適切に表現できるようにする。

3 検証項目

- (1) 「つかむ」段階において、既習単元の資料を基に「わたしの仮説！シート」を作成することは、学習問題に対する仮説を立てる上で有効か、「わたしの仮説！シート」の記述内容からつかむ。
- (2) 「調べる」段階において、各授業の終末に自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて評価することは、自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学習問題の解決に向かう上で有効か、学習計画表の記述内容からつかむ。

4 実践の概要（7時間完了）

段階	主な学習活動
つかむ	第1時 資料を基に日本の水産業についての疑問を出し合い、学習問題をつくる。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 【学習問題】水産業にかかわっている人々は、どのように魚をとり、消費者にとどけているのだろう。 </div>
	第2時 「わたしの仮説！シート」を作成し、学習問題に対する仮説を立て、仮説を検証するための学習計画を立てる。 【検証場面1】
調べる	第3～5時 作成した学習計画表を基に、仮説の検証に向けて個々で調べていく。各授業の終末には、自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて自己評価する。その後、次時の学習について考え、学習計画表に記述する。 【検証場面2】
まとめる	第6時 仮説の検証結果を発表し合い、学習問題について自分の考えをまとめる。 第7時 これからの水産業の在り方について、学習してきたことを基に話し合い、自分の考えをまとめる。

5 第1次授業研究の様子と考察

(1) 検証場面1の様子（第2時）

第2時では、「わたしの仮説！シート」を作成した。まず、本単元と関連する既習単元として、単元「米づくりのさかんな地域」の学習で活用した資料を提示し、前時に提示した水産業の資料と比較させることで、共通点や相違点を見いだすことができるようにした。その後、見つけた共通点や相違点を手掛かりに、仮説を立てた。

A児は、「農薬をまいている様子」の資料と、「養殖の様子」の資料を比較し、「どちらも、薬のようなものをまいている」「米づくりの方は液体のような物を、水産業の方は固まりのような物をまいている」という共通点や相違点を見いだし、「米づくりでは、農薬をまいて米を病気から守っていたので、水産業でも同じように、薬をまいて魚が病気にならないようにしているのではないか」という仮説を立てた。また、仮説を検証するための学習内容や学習方法も記述することができた【資料5】。

【米づくり】	【水産業】	【にているところ】
		どちらも、薬のような物をまいている。
		【ちがうところ】
		米づくりは液体のような物を、水産業の方は固まりのような物をまいている。
わたしの仮説！ 水産業にかかわっている人は、きっと、 薬をまいて魚が病気にならないようにしている		
なぜならば、米づくりでは、 農薬をまいて米を病気から守っていたから。		
と思う！		
わたしの仮説！を確かめるための、調べる内容や方法		
調べる内容は何をまいているのか、調べる方法は教科書や資料集です。		

【資料5 A児が作成した「わたしの仮説！シート」】

B児は、「米づくりがさかんな地域の分布図」の資料と、「日本でとれる魚の種類分布図」の資料を比較し、「どちらも、よくとれる場所が限られている」という共通点を見だし、「米づくりでは、米づくりに適した条件があったから、水産業でも、魚をとるために適した場所があるのではないか」という仮説を立てた。仮説を検証するための学習内容や学習方法については記述することができなかった【資料6】。



【資料6 B児が作成した「わたしの仮説！シート」】

【資料6】。

C児は、「コンバインで稲刈りをしている様子」の資料と、「巻き網漁の様子」の資料を選び比較したが、共通点や相違点を記述することはできなかった。仮説の欄には、「水産業では、いろいろな工夫をして魚をとっている」と記述したものの、その根拠を記述することはできなかった。

(2) 検証場面1の考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習問題に対して仮説を立て、仮説の検証に向けて学習内容や学習方法を考えようとしている。	学習問題に対して、仮説を立てようとしている。	学習問題に対して、仮説を立てようとしていない。
18人		5人 (C児)
12人 (A児)	6人 (B児)	

A児やB児のように、学習問題に対して、仮説を立てようとするのができた児童は、23人中18人だった。これは、「わたしの仮説！シート」を作成したことで、本単元と既習単元の資料を比較することを通して見付けた共通点や相違点を手掛かりにして、学習問題について予想することができたからであると考えられる。

一方で、C児のように、学習問題に対して、仮説を立てようとするのができなかった児童は、23人中5人だった。これは、提示した一つの単元の資料だけでは、共通点や相違点を見出すことができず、その結果、仮説を立てるための手掛かりがなく、当て推量の予想にとどまってしまったからであると考えられる。

(3) 検証場面2の様子 (第3～5時)

第3時から、「わたしの仮説！シート」を基に作成した学習計画表に沿って、仮説の検証に向けて個々で学習を進めた。各授業の終末には、自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて、「できた」「まだ途中」「できなかった」の3段階で自己評価した。

A児は、第5時の終末の振り返りに「できた」を選び、「私が立てた仮説は少し違っていたけど、写真に写っていたのは『養殖』といって、魚を育てていることが分かったから」と評価の理由を記述した。「次の学習に向けて」の欄には、「もう自分の仮説は検証できたので、調べたことを友達に分かりやすく伝えられるようにしたい」と記述し、仮説の検証を終えることができた。

B児は、第3時の終末の振り返りに「できなかった」を選び、「いろいろな方法で調べたけど、

仮説が合っているかどうか分からなかったから」と評価の理由を記述した。「次の学習に向けて」の欄には、「次の時間は、検証する仮説を変えて、『水産業でも、米づくりと同じように、加工をしているのではないか』という仮説を確かめたい」「方法は、今日インターネットでうまくいかなかったから、教科書でまずは調べる」と記述し、学習内容や学習方法を調整することができた【資料7】。

学習をふり返って	次の時間に向けて
仮説の検証が・・・ 【 できた ・ まだ中 ・ できなかった 】【 なぜなら・・・ いろいろな方法で調べたけど、仮説が合っているかどうか分からなかったから。	検証する仮説は・・・ 【 そのまま ・ 変こう加工 】【 なぜなら・・・ 今日の仮説は一回やめて、水産業でも加工しているのかを調べたいから。 調べる内容や方法は・・・ インターネットは今日うまくいかなかったから、教科書でまず調べます

【資料7 B児の振り返りの記述】

C児は、第4時の終末の振り返りに「できた」を選び、「仮説の検証が全部できたから」と評価の理由を記述した。しかし、「検証結果」の欄を見ると、「機械を使って、たくさんの魚をとっているのではないか」という仮説に対して、「魚がよくとれる条件」に関わることが書かれているだけであった。また、「次の学習に向けて」の欄には、何も記述することができなかった。

(4) 検証場面2の考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かい、仮説が検証できるまで取り組むことができている。	自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができている。	自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができていない。
17人		6人 (C児)
7人 (A児)	10人 (B児)	

A児やB児のように、自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができた児童は、23人中17人だった。これは、各授業の終末に、自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて評価することで、できたことやまだ十分でないことなど、自らの学習状況を把握することができ、その結果、次時の学習について見通しをもつことができたからであると考えられる。

一方で、C児のように、自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができなかった児童は、23人中6人だった。これは、学習を振り返り評価する場面で、自己評価だけでは自らの学習状況を正確に把握することが難しい児童もいたことが原因であると考えられる。

V 長期研修で学んだこと

1 大学入試センター教授 山地 弘起氏

山地氏からは、児童の主体性を育む上での留意点や、振り返りにおける評価活動の進め方について指導を受けた。

児童の主体性を育む上で、予想したり学習計画を立てたりすることは大切なことであるが、まずは、扱う教材に対して児童が当事者意識をもつことが重要である。自分とは関係のないことではなく、教材と自分とのつながりを児童が捉えることが、追究意欲につながり、主体的な学びを促す。そのためには、扱う教材とどのように出合わせるかが大切になる。

振り返りについては、第1次授業研究では、「調べる」段階において、各授業の終末に、自らの学習を振り返り自己評価することで、自らの学習状況を把握することができるようにしていたが、児童が自ら

評価することは難しい。学力が低い児童ほど、自己評価が甘くなりがちである。児童が自分の力だけで評価することが難しいようであれば、学級の仲間と評価し合う他者評価にするという選択肢もある。ただし、他者評価を行えば学習状況を正確に把握できるようになる、というわけではない。効果的な評価活動にするためには、誰と評価し合うのか、ペアやグループの組み方に配慮する必要がある。

以上の指導・助言を踏まえ、第2次授業研究は、単元の導入において、自動車と自分の暮らしが密接につながっていることを実感し、自動車工業に対する追究意欲を高めることができるような学習活動を取り入れる。また、振り返りでは、児童が自らの学習状況を正確に把握することができるように、他者評価を行う。その際、調べた内容が似ている児童同士をペアにするなど、評価し合う相手を意図的に編成することで、より正確に評価し合うことができるようにする。

2 広島大学准教授 深谷 達史氏

深谷氏からは、振り返りをする上での留意点や、振り返りにおける評価活動、調べ学習をよりよいものにするための留意点について指導を受けた。

振り返りにどのようなことを書けばよりよいのか、児童が分かっていないことがある。次の学びにつながるような振り返りができている児童がいたら学級全体に紹介したり、どのようなことを意識して振り返りを書けばよいのかのポイントをまとめて掲示したりなど、よりよい振り返りについて児童が理解できるように工夫すると、振り返りの質が上がる。

また、振り返りにおける評価活動については、児童の力だけでは正確な評価は難しいこともある。必要に応じて、教師からのフィードバックがあるとよい。

以上の指導・助言を踏まえ、第2次授業研究は、よりよい振り返りについて児童が理解できるように、次の学びにつながるような振り返りができている児童がいたら学級全体に紹介する。また、振り返りにおける評価活動では、教師からのフィードバックもすることで、自らの学習状況を正確に把握することができるようにする。

VI 第2次授業研究に向けての改善点

1 検証項目1について

「わたしの仮説！シート」を作成する際に、複数の既習単元の資料と本単元の資料を比較することで、仮説を立てる上での手掛かりとなる共通点や相違点を見いだすことができるようにする。

2 検証項目2について

仮説を検証することができたかを振り返る際に、自己評価に加え、他者評価も行うことで、自らの学習状況を正確に把握することができるようにする。

VII 第2次授業研究（9月・10月）

1 単元 自動車をつくる工業

2 目標

自動車生産に関わる人々は、消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして、自動車生産を支えていることを理解している。また、我が国の自動車生産について、製造の工程、工場相互の協力関係、優れた技術などに着目して仮説を立て、自らの学習を調整しながら調べ、自動車生産に関わる人々の工夫や努力を関連付けて、工業生産を支える働きを考え、適切に表現している。

3 検証項目

- (1) 「つかむ」段階において、複数の既習単元の資料と本単元の資料との比較を通して「わたしの仮説！シート」を作成することは、学習問題に対する仮説を立てる上で有効か、「わたしの仮説！シート」の

記述内容からつかむ。

(2) 「調べる」段階において、各授業の終末に自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて自己評価や他者評価をすることは、自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学習問題の解決に向かう上で有効か、学習計画表の記述内容からつかむ。

4 実践の概要（7時間完了）

段階	主な学習活動
つかむ	<p>第1時 生活の中で自動車を利用している場面について出し合う。 資料を基に日本の自動車生産についての疑問を出し合い、学習問題をつくる。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【学習問題】自動車づくりに関わる人は、よりよい自動車をたくさんつくるために、どのような工夫や努力をしているのだろう。</p> </div> <p>第2時 「わたしの仮説！シート」を作成し、学習問題に対する仮説を立て、仮説を検証するための学習計画を立てる。 【検証場面1】</p>
調べる	<p>第3～5時 作成した学習計画表を基に、仮説の検証に向けて個々で調べていく。各授業の終末には、自らの学習を振り返り、仮説を検証することができたかについて自己評価や他者評価をする。その後、次時の学習について考え、学習計画表に記述する。 【検証場面2】</p>
まとめる	<p>第6時 仮説の検証結果を発表し合い、学習問題について自分の考えをまとめる。 第7時 これからの自動車産業の在り方について、学習してきたことを基に話し合い、自分の考えをまとめる。</p>

5 第2次授業研究の様子と考察

(1) 検証場面1の様子（第2時）

第2時では、「わたしの仮説！シート」を作成した。第1次授業研究では、提示した一つの単元の資料だけでは共通点や相違点を見いだすことができず、仮説を立てることができない児童がいた。そこで、本単元と関連する既習単元として、単元「米づくりのさかんな地域」と「水産業のさかんな地域」の学習で活用した資料の中から、適した資料を精選して提示し、前時に提示した自動車生産の資料と比較させた。その後、見付けた共通点や相違点を手掛かりに、仮説を立てた。

B児は、「巻き網漁の様子」の資料と「日本の年間自動車生産台数」の資料を比較し、「どちらも、たくさん生産することを目指しているところが同じ」という共通点を見だし、「水産業では、魚群探知機を使って生産性を高めていたから、自動車づくりでも、何か機械を使うことで生産性を高めているのではないか」という仮説を立てた。第1次授業研究では、仮説を検証するための学習内容や学習方法については記述することができなかったが、本単元では記述することができた。

第1次授業研究で仮説を立てることができなかったC児は、「農家が使う道具の変遷」の資料と、「昔と今の自動車の変容」の資料を比較し【資料8】、「どちらも、昔と今で変化している」という共通点を見だし、「米づくりでは、昔と比べて道具が変化して手間が少なくなったから、自動車づくりでも、道具が変わって働く人が楽になって、その分たくさん自動車をつくれるようになった」という仮説を立てた。

【学習してきた食料生産】	【自動車産業】	【にているところ】
		<p>どちらも、昔と今で変化している。</p> <p>【ちがうところ】</p> <p>農業と工業。食べ物ともの。</p>
<p>わたしの仮説！</p> <p>よりよい自動車をつくるために、きっと、なぜならば、米づくり・水産業では、</p> <p>たくさん自動車をつくるために、きっと、とと思う！</p> <p>道具が変わって働く人が楽になって、その分たくさん自動車をつくれるようになった なぜならば、<u>米づくり</u>・水産業では、</p> <p>わたしの仮説！を確かめるための、調べる内容や方法 昔と比べて道具が変化して手間が少なくなったから。</p>		

【資料8 C児が作成した「わたしの仮説！シート」】

くさん自動車をつくれるようになったのではないか」という仮説を立てた。仮説を検証するための学習内容や学習方法については、記述することができなかった。

(2) 検証場面1の考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習問題に対して仮説を立て、仮説の検証に向けて学習内容や学習方法を考えようとしている。	学習問題に対して、仮説を立てようとしている。	学習問題に対して、仮説を立てようとしていない。
21人		2人
15人 (A・B児)	6人 (C児)	

A児、B児、C児のように、学習問題に対して、仮説を立てようとしたことができた児童は、23人中21人だった。これは、一つの既習単元ではなく、複数の既習単元から資料を精選して提示することで、多くの児童が共通点や相違点を見いだすことができ、その結果、見付けた共通点や相違点を手掛かりにして、学習問題について予想することができたからであると考えられる。

(3) 検証場面2の様子 (第3～5時)

第3時から、「わたしの仮説！シート」を基に作成した学習計画表に沿って、仮説の検証に向けて個々で学習を進めた。各授業の終末には、まず、その時間に調べて分かったことについて、意図的に編成したペアで伝え合い、互いに評価し合った。伝え合う中で、児童は、よく分からなかったことについて質問をしたり、もっと調べた方がよいことについて助言したりした。その後、他者評価で聞いた内容を参考にしながら、仮説を検証することができたかについて、「できた」「まだ途中」「できなかった」の3段階で自己評価した。

よりよい振り返りについて児童が理解できるように、各授業の初めには、次の学びにつながるような振り返りができている児童の記述を学級全体に紹介し、共有するようにした。また、各時間の児童の振り返りの記述を基に、支援が必要であると感じた児童に対しては、調べる方法を提案したり、似た仮説の検証をしている児童とつないだりなど、必要に応じて個々に支援した。

B児は、第5時の終末の振り返りに「できた」を選び、「私の仮説は正しくて、自動車産業では水産業と同じように、機械を使って生産性を上げていることが分かったから」と評価の理由を記述した。「次の学習に向けて」の欄には、「自分の仮説は検証が終わったので、友達の仮説についても検証してみたい」と記述し、仮説の検証を終えることができた。

第1次授業研究で、自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができなかったC児は、第4時の終末の振り返りに「まだ途中」を選び、「自分では仮説の検証がもう十分だと思ったけど、『自動車をつくっている様子もあつた方がいいと思う』と友達からアドバイスされたので、まだ足りないと思ったから」と評価の理由を記述した。「次の学習に向けて」の欄には、「次の時間は、『自動車をつくっている様子』について、動画を見て調べる」と記述し、学習内容や学習方法を調整することができた【資料9】。

学習をふり返って	次の時間に向けて
仮説の検証が・・・ 【 できた ・ まだと中 ・ できなかった 】 なぜなら・・・ 自分では仮説の検証がもう十分だと思ったけど、「自動車をつくっている様子もあつた方がいいと思う」と友達からアドバイスされて、まだ足りないと思ったから。	検証する仮説は・・・ 【 そのまま ・ 変こう 】 なぜなら・・・ まだ、カンベキじゃないから。 調べる内容や方法は・・・

【資料9 C児の振り返りの記述】

(4) 検証場面2の考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かい、仮説が検証できるまで取り組むことができている。	自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができている。	自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができていない。
20人		3人
13人 (A・B児)	7人 (C児)	

A児、B児、C児のように、自らの学習状況を基に、学習を調整しながら、学習問題の解決に向かうことができた児童は、23人中20人だった。これは、自己評価だけでなく、他者評価も取り入れたことで、より正確に自らの学習状況を把握することができ、その結果、次時の学習について見通しをもつことができたからであると考えられる。

VIII 研究のまとめ

1 実践後の児童の様子

第2次授業研究の「まとめる」段階では、学習してきたことを基に、これからの自動車産業の在り方について話し合った。「つかむ」段階において、「米づくりでは、昔と比べて道具が変化して手間が少なくなってきたから、自動車づくりでも、道具が変わって働く人が楽になって、その分たくさん自動車をつくれるようになったのではないか」という仮説を立てたC児は、「自動車づくりに関わる人たちが努力や工夫をたくさんしてきたから、自動車はどんどん発展してきた。だから、これからも努力や工夫を続けて、事故が起きないような安全な自動車をつくってくれると思う」と発言し、未来に向けて、根拠を伴った予想を立てようとする姿が見られた。また、数日後にはC児が、「家で調べてみたら、この前の話合いで出てきた『空を飛べる車』の開発が、実際に進んでいるという記事を見つけた」とうれしそうに知らせに来た。C児のように、実践が終わった後もこれからの自動車産業の在り方に関心を持ち続け、自ら進んで調べようとする児童が何人もいた。

次單元「これからの工業生産とわたしたち」では、中小工場に関わる資料を基に、日本の中小工場における工夫や努力について予想させると、B児は、「自動車の組み立て工場と比べると、工場の大きさが全然違うから、自動車産業とは違って、大きな機械を使っていないと思う。生産性ではなく、品質で勝負しているのではないか」と発言した。既習単元の資料を提示しなくても、学習してきたことを根拠に予想を立て、問題解決に向かおうとする児童の姿は、私が本研究で目指した児童像であり、研究の確かな成果を感じることができた。

2 今後の研究に向けて

本研究では、児童が個々で立てた仮説の検証に向けて、振り返りを繰り返しながら学習を進めることで、主体的に問題解決しようとする児童の姿に迫ることができた。一方で、自分が立てた仮説を検証し終えることができず、途中で諦めてしまう児童もいた。『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する上での二つの側面である「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」は、別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現われるものであるとされている。今後は、児童が粘り強く取り組むことができるように、単元の導入段階の工夫や適切な学習問題の設定などについて追究し、目指す児童像に迫っていきたい。

参考・引用文献 米田豊『「主体的に学習に取り組む態度」を育てる社会科授業づくりと評価』明治図書 (2021)